

君といつまでも

内藤真理子

ここ何年か、年賀状だけの付き合いだった友人のご主人から、彼女の死を知らせる便りが届いた。二月に亡くなり、家族だけで葬儀を済ませた由が書かれていた。

私と同じ七十七歳、親しかった友人の中では最初の訃報である。彼女とは、子供が幼稚園の時からのお付き合いだ。その当時のママ友仲間と誘い合わせて、仏前にお別れに行って来た。

散骨を希望しているとのことで、遺影と共に、美しい布に包まれた小さな骨壺がいくつも祭壇にあった。

故郷が遠いこと、子供が少なく、これからのことを思うと墓じまいを考えた方が良いのではないかと、ご夫婦で考えた末の決断だったそうだ。

在りし日そのままの遺影を見た途端、過ぎし日の思い出がワーツと頭に甦った。私と同じ息子二人の母親の彼女は、子供たちにジューズを与える時、大きさの違うコップに入れ、選ばせていた。そして一見、量が多そうでも実際は同じ量であるという事を実験して見せたりするような教育熱心な母親だった。

又、自分の母親の老後を献身的に看取った姿、巣立った息子家族と共に暮らすことを情熱的に夢見た姿。

当時は「そんなこと無理よ」と思い、口にも出していたと思うが、遺影を見た途端、何もかもがダブった。同世代の私は彼女の考えが当たり前。長い間会わなくても、彼女の考えていること、やろうとしていた事が手に取るようにわかった。同世代を生きた者のこれが本来の価値観なのではないだろうか。こんな気持ちになるとは、思いもよらなかった。

「肺に障害があつてね、入退院を繰り返していたのですよ。酸素ボンベを付けてから、ずいぶん楽になったようです。私も具合が悪くなりましたね、私が入院している時に亡くなりました。でも、最後は苦しまなかったように穏やかな顔をしていました」とご主人。

これからも奥さんの思い出と共に生きて行くのだろう。